【埼玉】診療所設立のため300人から1億円借金、5年で完済-鋤柄稔・シャローム病院院長に聞く◆Vol.1

2022年4月29日 (金)配信 m3.com地域版

シャローム病院（東松山市）は埼玉県中央部に位置する比企地域で唯一、緩和ケア病棟を持ち、ホスピスケアを提供している。救急は積極的に受け、訪問診療は疾患名や場所を問わず向かう。決して規模は大きくない民間病院ながら、長年地域医療に尽力してきた姿勢が評価され、院長の鋤柄稔氏は2022年に「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞した。ゼロからの診療所立ち上げの苦労やホスピスケアへの思いなどについて聞いた。（2022年4月8日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

シャローム病院病院長・鋤柄稔氏

――シャローム病院について教えてください。

病院の名前である「シャローム」とはヘブライ語で「平安」を意味します。1994年に19床の有床診療所としてスタートし、2013年に55床に増床し病院へと移行しました。16年には緩和ケア病棟を開設しています。

当病院の柱は「緩和医療」「在宅医療」「救急医療」の3つです。もともとホスピスケアをやりたいという思いから診療所を立ち上げたこともあり、緩和医療には力を入れています。在宅医療については11人の常勤医全員が往診をしており、基本的に疾患の種類や患者の年齢、訪問先の場所を問わず24時間365日対応しています。救急医療についても、受け入れ要請は可能な限り断らないように努力しています。

――院長はどのような経緯で医師を志したのでしょうか。

私が医師を目指したのは、同級生が医学部に合格したことがきっかけです。医学部は学費が高くて自分には縁のない場所だと思っていたのですが、その同級生から国立であれば費用は抑えられると聞いて興味を持ちました。そこで浪人中に進路希望を経済学部から医学部へと変え、信州大学医学部に進学しました。

ただ優柔不断な性格であったことから、なかなか専門領域が決められませんでした。そこでまずは内科を選択し、卒業後は信州大の教授の紹介で埼玉医大の血液内科で働き始めたのです。1年半ほど働いたとき、外科に移りたいと思うようになりました。ただ外科の中でもどの分野が自分に向いているのかわからなかったため、さまざまな手術を見てみようと麻酔科に異動しました。そして30歳を過ぎたころに、今度は消化器外科へ。その後、肝臓移植に興味を持ち、42歳で米国ピッツバーグ大学に留学しました。本当にしょっちゅう興味が移り変わるのです。

埼玉医大勤務時の手術

――勤務医としてさまざまな診療科を経験し、米国留学もされた中で、なぜ独立することにしたのですか。

　それには留学中に起きた出来事が大きく影響しています。留学して半年が過ぎたころ、急性肝炎になったのです。ともかく体がだるく、発熱や吐き気があり、ほとんど食事もとれませんでした。自宅で一週間ほど療養してから出勤すると、同僚から「黄疸が出ている」と指摘され、そこで初めて肝炎であるとわかりました。自分で自分を診療していたために、気づかなかったのでしょうね。

　当時、私は埼玉医大の教授が開発したカラードプラを使って研究をしていました。新しい分野であったことから、執筆した論文は医学雑誌にも頻繁に掲載されていました。そこに楽しみや喜びを感じていたのです。ところが実際に自分が患者になって「死ぬかも知れない」と思ったとき、雑誌に掲載された実績は、何の意味もないと気づきました。私が後世に残したいのはそんなことではない。一人一人の患者に目を向けること、そして自分の家族を大事にすることこそ大事にすべきだと思いました。それで「論文を書くのはやめよう」「大学病院をやめよう」と決めたのです。

――自分が患者になったことが、人生の大きな転機になったのですね。ホスピスケアを目指したのはなぜでしょうか。

　その頃は今とは違って患者への病名の告知は積極的には行われておらず、自分が「がん」であると知らずに亡くなっていく方が少なくありませんでした。私はそのあり方に疑問を持っており、患者さん第一の医療、自分や家族が受けたいと思える医療を提供したいという思いが募りました。そこで私はクリスチャンであることから、キリスト教の教えをもとにしたケアを行おうと、ホスピスケアを行う有床診療所の設立を目指すことにしました。

診療所建設時

――既存の病院を引き継ぐのではなく、完全にゼロからの診療所づくりとなると、苦労も多かったのではないでしょうか。

　ええ、特に「排水路」「遺跡」「お金」の問題に苦しめられました。土地は実家の畑があった場所で、所有していた姉夫婦から買い取ったのですが、市街化調整区域であったため新たに排水路を作らなければいけませんでした。そ

のうえ遺跡の発掘調査も必要で、建設許可はなかなか下りませんでした。

――建設費用はどのように工面されたのですか。

有床診療所の開設には3億円以上必要だったのですが、私個人の蓄えはほとんどありませんでした。というのも、研究の特性上、カラーでの論文掲載が必要で、白黒に比べて掲載料が高く給料のほとんどがそこに消えていたのです。すると通っていた教会のみなさんが、病院の建設協力委員会を立ち上げて、教会内だけでなく地域からも資金を募ってくれたのです。そこで無利子で返済期限もないに等しい、特典もほとんどない病院債を発行し、約300人から1億円を集めることができました。残りの2億円は、患者さんでもあった銀行の頭取のお力添えによって銀行から借りることができ、なんとか資金を準備できました。そして診療所の開設を志してから4年ほど経った1994年に、19床の有床診療所の開設に至ったのです。

それまでの間は埼玉医大で勤務し続けました。恩師である教授は留学先にカラードプラを送ってくれたうえに、帰国後は辞めると宣言している私を雇用し続け応援してくれて、本当に感謝しかありません。

現在のシャローム病院

――有志から1億円もの資金が集まるというのは素晴らしいことですね。ただその分返済は大変だったのではないでしょうか。経営は順調でしたか。

開所後、患者は順調に増えいき、半年後には1日50～60人ほどが訪れるようになりました。ただ常勤医は私一人だけで、外来は夜7時ごろまで受け付けていて、多い日は1日230人ほどを診たと思います。外来が終わってから訪問診療に行き、土曜日は外来と手術、日曜は時間のかかる手術をしていました。もちろんその合間に入院患者にも対応しています。夜間も休日も、救急要請があればほとんど受けていたと思います。水曜日の午後から木曜日の朝までは大学病院から交代の医師が来てくれたため、休ませてもらいました。この時間が唯一の休息でしたね。

ともかく300人に早く返済をしようという思いでした。自分の給料も埼玉医大勤務時よりも低く設定していました。おかげで、5年で全員への返済が完了しました。その後も2002年に現在の副院長である狩野契先生が着任するまで、常勤医は私だけでした。倒れなかったのは神様のお守りがあったからだと思っています。

◆鋤柄 稔（すきがら・みのる）氏

1973年信州大医学部卒。1975年に埼玉医科大附属病院に入局し、1989年に米国ピッツバーグ大学に留学。1994年にシャローム鋤柄医院を開設。2013年に有床診療所から病院へと移行、シャローム病院へと名称変更し、院長に就任。2022年に第10回「日本医師会 赤ひげ大賞」受賞。

【取材・文＝にしみねひろこ（写真は病院提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索